

海賊の終焉：中国と日本

村上 衛（人文科学研究所 准教授）



ただ今ご紹介にあずかりました、京都大学人文科学研究所の村上 衛と申します。

人文科学研究所というところは、人文学の非常に幅広い問題を研究しておりまして、決して、海賊だとかアヘン密輸だとか悪いことを研究している研究所ではございません。そういうことをやっているのは私一人でございます。

私はこの浜松で生まれて、浜松育ちなものですから、浜松にまいますと、ついつい「何々じゃん」とか「何々だら」とか、遠州弁で話したくなるんですけども、それは封印して、きょうは標準語で話をさせていただきます。

海賊ネタですと、村上海賊というのが有名なんですけども、残念ながら、私はこの海賊とは無関係であります。その村上海賊と申しますと、やはり2013年、和田竜氏の「村上海賊の娘」という小説がヒットしたことは、ご存じの方もいらっしゃると思います。この本、単行本、文庫合わせて200万部ぐらい売れたんですけども、大変うらやましいと私は思ったわけですね。

なぜかと申しますと、同じ2013年、私は「海の近代中国」という本を出したんですが、これはわずか1600部しか刷ってなくて、まだ売り切れておりません。680ページぐらいあって、枕としても使えますので、ぜひ、お買い求めいただければと思います。

それでは、少しここから硬い話になりまして、きょうは、日本、それから中国の海賊の終わり方ということで、どのように海賊が終焉、終わりを迎えるのかということをお話いたします。

なぜそんなことをやるのかということなんですが、これは政府の言うことを聞かない、政府から最も遠いところにいるアウトサイダーである海賊を見ること、そして、彼らがどのように終わりを迎えたのかを見ることで、日本と中国の国家、政府と、それから社会が、どのように違うのかということを歴史的に理解できると思うからなんです。

日本と中国、いろいろ違いがありまして、いろいろな摩擦もございますけども、その違いというものを少しでもご理解いただければ、あまり摩擦にならなくなっていくんではないかと考えております。

本講演のねらい

- 日本の海賊の終わり方
- 中国の海賊の終わり方
→政府のいうことを聞かない、
アウトサイダー＝海賊をどうするか
- 海賊の「終わり方」をみることで
日本・中国の「国家」と「社会」
の特質の違いを歴史的に理解できる

それではまず、日本の海賊からまいります。

日本の海賊は、どこにいたかということなのですが、一番有名なのは瀬戸内です。ね、瀬戸内海のあたり。それから、九州の北部ですね。それから、和歌山県の熊野とか、三重県の志摩のあたりです。スライドには浜名湖が出ておりますけども、これは地元サービスでして、海賊集団がいたということではございません。

それで、なぜこんなところにいるのかということなのですが、一つは海岸線が入り組んでいるところですね。それから、貿易のルート。例えば、瀬戸内だったら、西日本から京都付近までの貿易のルート、それから九州であれば、日本と朝鮮半島、あるいは日本と中国、この貿易のルートに当たっておりまして、このあたりを抑えることで、海賊たちは関所をつくって、そこで税金というか、お金を取り立てて収入源にしていたわけです。

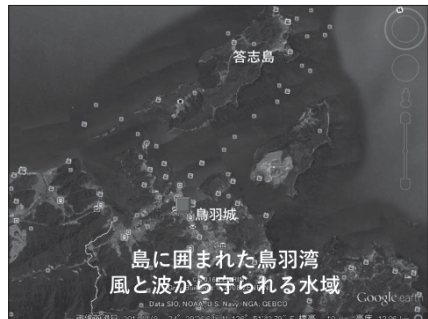
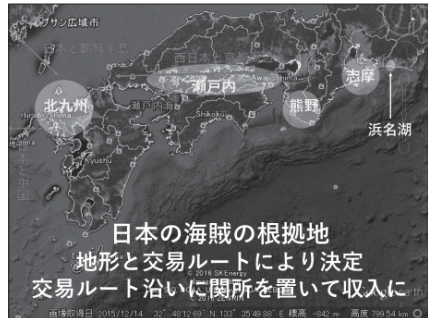
地形的に見ますと、こうした島に囲まれた水域を拠点としています。これは鳥羽湾なんですけれども、三重県の観光地ですが、風と波から守られている状況になっています。こんな感じで、非常に風光明媚なところが多いわけです。昔から、漁業が非常に盛んなところでした。海賊というのは、漁民が武装している、そんな感じのイメージで捉えていただければと思います。

つまり、日本の海賊の多くは、漁民と武士を兼ねているような存在であったということをして、まずご理解いただければと思います。

それでは、日本で海賊が活躍した時代、いろいろあるんですが、少し絞りますと、まず、源氏と平家の合戦、源平合戦。この源平合戦は、最終的に、海賊の多くが源氏の味方につくことによって、平氏はどんどん追い詰められて、現在の下関あたりの壇ノ浦の戦いで滅亡するということになります。

それから、14世紀、日本は南北朝の動乱の時代であります。このときは、日本の海賊が、朝鮮半島や中国の沿岸で暴れ回るということをやっておりました。

それから、1550年代ごろ、これは後期倭寇というんですが、この倭寇の「倭」というのは本来、日本を指すのなんですけども、この時代の倭寇は主に中国人の海賊であります。この中



国人海賊が日本なども拠点としつつ中国沿岸で暴れていたんですね。

それから、ほぼ同じころ、戦国時代の日本では海賊は各大名と手を結んだりして、水軍ともいわれますが、活躍していたわけです。

その戦国時代なんですが、一番有名な村上水軍というのは、毛利と手を組んでいることも多かったんですが、ほかにもこの近辺では、有名な武田とか、それから織田とかいった戦国大名たちは、それぞれ水軍を編成していたわけです。

ただ、この時代になりますと、戦国大名の力は次第に強くなってきて、海賊をどんどん抑えつけていくようになります。従って、海賊にとってみると、だんだん戦国大名の部下になっていくような感じになりまして、自由に、自分の思いどおりにやっていたスペース、空間というものは少なくなっていくわけです。

その中で一番有名な信長が、どのように海賊を使ったのかということなんですが、これが一番有名な石山合戦といわれる、石山本願寺に立てこもった一向一揆を信長が攻めたという戦いであります。この石山本願寺の補給ルートを封鎖するために、信長は海賊を使って封鎖を行っていくんです。

その封鎖を破るためにやってきたのが、毛利と村上の水軍です。彼らが食料を持ってきて、そして、信長の部下の水軍たちと戦ったのが1576年、それから、1578年の二度にわたる木津川口の戦いになります。この1576年のほうが、先ほど申しました、「村上海賊の娘」に書かれた戦いでありまして、このときは、毛利、村上水軍が勝利をおさめて、食料を石山本願寺に運び込んだわけです。ところが、1578年のほうの戦いは、織田方、織田水軍が勝ちまして、食料を運び込むことができなかったために、だんだん飢えていった石山本願寺は、信長と講和を結んで、石山本願寺を退去するということになります。ちなみに、その石山本願寺のあとに秀吉が建てた城が大坂城ということになります。

こうして、信長、それからそれを継いだ秀吉が天下統一を進めていく中で、いろいろなことをやるんですけども、一つには、商業がしやすいように、海と、それから陸の関所を次々と廃止していきます。これは海賊にとって大変困ったことで、海賊の収入がなくなってしまうわけです。

日本における海賊の終焉

- 信長・秀吉が天下統一をすすめる中で
(陸・海の) 関所を廃止
→ 海賊の収入がなくなる
- 九州平定→豊臣秀吉の海賊停止令
(1588年)
→ 大名に海賊をコントロール
するように命令

31

日本における海賊の終焉

- 海賊は大名の家臣に
→ 小田原城攻め(1590年)や
朝鮮出兵(1592~1598年)に動員
- 兵漁分離= 武士と漁民は違う身分に
→ 海賊の消滅

32

それから、1588年、秀吉は九州の島津氏を攻めた際に、その後に、海賊停止令というを出して、各大名たちに、自分の領地のあたりにいる海賊をきちんとコントロールしなさいというふうに命令を出すわけです。

こうして、海賊は大名の家臣、家来になっていきます。その結果、秀吉が、例えば、1590年に小田原城に立てこもる北条氏を攻めた際には、海賊が動員されて、小田原城の海上封鎖や、さまざまな物資を運ぶのに使われたんですね。

それから、1592年から秀吉が朝鮮に攻め込みますと、海賊たちは動員されて、物資を運んだり、兵隊を運んだり、それから、朝鮮の水軍と戦うということに駆り出されて、多くの犠牲を払うわけです。

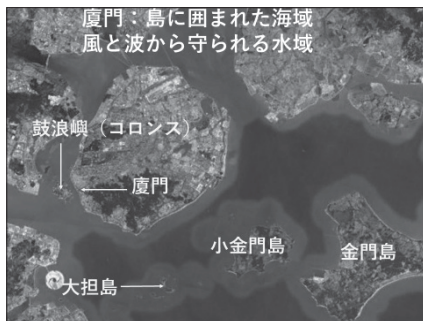
それから、同じころ、兵農分離が有名ですが、兵農分離と申しますか、身分を固めていく際に、武士と農民が違うように、武士と漁民も違う身分になっていきます。つまり、武士と漁師さんが一体であった日本の海賊というのは、身分的にも消滅していくということになります。

次は中国です。

中国の海賊の根拠地、これも偏っているんですが、福建、広東、それから浙江省、それから山東半島、あと、遼東半島、このあたりになります。地形的には海岸線が入り組んだところなんです。そして、海上貿易ルート。先ほど、陸のシルクロードの話がありました、このように、海上の、海のシルクロードに沿ったところに根拠地を持って

いました。もう少し細かく見ますと、例えば、福建省には、廈門という港町がありまして、その廈門の周辺というのは、このように島々に囲まれております。先ほどの鳥羽の例と同じように、やはり風と波から守られている海域です。このように、非常にここも風光明媚なところなんです、こういった島々に囲まれているために船にとって安全な場所なんです、一方で、海賊の根拠地となったわけです。

中国における海賊の時代というのは、いつかと申しますと、先ほど出てきた、前期倭寇、後期倭寇の時代があるんですが、その後、日本は大体1600年ぐらいまでに、海賊はいなくなるんです。ところが中国では、その後も、17世紀には、鄭氏というすごい海賊勢力が現れ



ます。それから、18世紀末から19世紀初頭には、嘉慶海寇といわれる、また海賊が暴れる時代があります。さらに、アヘン戦争の後、19世紀の半ば、1850年代になっても、まだ海賊は暴れています。

そのうちの幾つかを紹介いたしますと、まず、この鄭氏という勢力をつくり上げたのは、鄭芝龍という人物です。この人は、日本ともかかわりが深く、日本の平戸に住んでおりました。奥さんは、たくさんい

るんですが、そのうちの一人は日本人妻のマツという人で、平戸藩士の娘でありました。この人から鄭成功という有名な人が生まれます。平戸にまいますと、鄭成功誕生石というのがございまして、この岩にマツが手をついて踏ん張って、鄭成功を産み落としたと伝わっております。本当かうそかは分かりません。

そうした鄭芝龍なんですが、海賊集団同士の激しい戦いを勝ち抜いて、1630年代には、1000隻もの船団を率いて、中国の東南沿海を支配する大勢力になります。この力を見た明王朝も、鄭芝龍にちゃんと官職を与えて、彼に中国東南を管理してもらおうということになるわけです。さらに、当時、台湾に進出していたオランダ東インド会社も、その力を認めて手を組んでビジネスをやっていくということになります。

さて、この鄭氏が大勢力となったころ、明の王朝は大変なことになっていて、1644年に滅亡してしまうんですね。そして、それにかわるように、北から、清朝という王朝が中国の全体を支配していく時代になります。

それに対して、この鄭氏、鄭芝龍は実は降参しちゃうんですが、その息子の鄭成功と、その子ども、孫は、清朝に抵抗していくわけです。その際に、1661年には、オランダ東インド会社を台湾から追っ払って、台湾を占領します。この鄭成功の活躍が日本にも伝わって、人形浄瑠璃や、のちに歌舞伎の「国姓爺合戦」となるわけなんですが、そのモデルが鄭成功ということになります。

ちなみに、本当は、この国姓爺と書かないといけないんですね。なぜ、国姓爺というかという、鄭成功の活躍から、その明の亡命政府の皇帝から「朱」という姓を与えられたために、国姓爺というのを名乗っていいということで、国姓爺といわれるんですが。

この鄭成功は、何年か粘るんですけども、しかし、その孫の時代になると、1683年、鄭氏は清朝に降伏するんですね。

こうして、中国本土は大体100年間ぐらい平和な時代になるんですね。その18世紀の平和な時代なんですが、清朝の海上警察と申しますか、清朝の水師というものは、本当は、中国沿岸全体を警備しないといけないんですが、予算も人も船も足りないんですね。従っ

17世紀最大の海賊：鄭芝龍

- 日本の平戸に滞在、日本人妻マツ（平戸藩士の娘、鄭成功の母）
- 海賊集団同士の戦いを勝ち抜く
→1000隻もの船団を率い
中国東南沿海を支配（1630年代）
- 明王朝から官職を与えられる
- オランダ東インド会社も協調関係に

て、非常に小規模な海賊は出没していました。当時、沖合に出ている船は大体武装しているんですが、例えば、武装した漁民が、あの商船は大して武装してないなと思うと襲っちゃうという、そういったしょばい海賊がたくさん出る時代であります。一方、数十隻、数百隻の大船団のような海賊は、大体100年間ぐらいは出てこなかったんです。ところが18世紀の末になると、また、海賊が現れます。これは原因は分からないんですが、ベトナムあたりの戦乱、これが原因で、中国とベトナムの国境付近から、広東省、福建省、浙江省の沿海で暴れ回るわけです。

この時期になりますと、この広東のあたりに欧米人が来ておりましたので、彼らの記憶に、この海賊が刻みつけられるということになります。そこで、このチェン・ポー・ツイという海賊のイメージが残っていてまして、どうなったかという、2007年、「パイレーツ・オブ・カリビアン／ワールド・エンド」では、サオ・フェンという海賊になっています。チョウ・ユンファという有名な香港の俳優が演じておりました。これはまだいいんですけども。

次に、女性の海賊、鄭氏というのが出てくるんですね。旦那さんが海賊の親王で、死んじゃった後、その勢力を引き継いで暴

れたイメージが残ったんですね。彼女が、そのさっきの「パイレーツ・オブ・カリビアン」でどうなったかという、こんなふうになっちゃったおばさんになっているわけです。

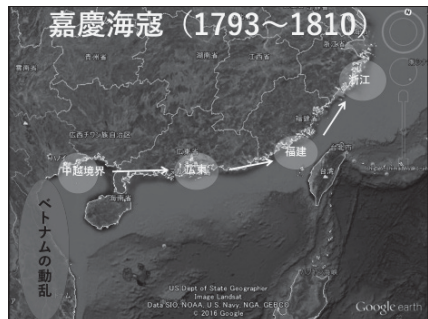
こうした嘉慶の海賊なんですが、王朝はどのように鎮圧したかといいますと、これはもう武力だけでは無理なんですね。どういうふう鎮圧するかというと、まずは海賊に形だけすみませんということで謝って、降伏してもらって、その代わり、水師、海上警察に入れちゃうんです。何というんでしょうか、泥棒を警察に入れるようなものですから、すごいですけども、こういったことで一応抑え込む。

清朝の海域支配と鄭氏

- 明朝の滅亡→清朝の中国本土支配開始 (1644年)
- 鄭氏（鄭成功とその子孫）は清朝に抵抗
→台湾占領 (1661年)
人形浄瑠璃・歌舞伎の『国性爺合戦』のモデル。本当は「国姓爺」
- 鄭氏降伏 (1683年) →「清朝の平和」
→海上貿易の再開 (1684年)

「清朝の平和」と海賊（18世紀）

- 清朝水師（海上警察）は中国沿岸全体を警備するには予算も人員も船も不足
- 小規模な海賊は出没
武装した漁民が商船を襲う
- 大規模な海賊は100年間出現せず



それから、海賊たちにとって、もっとも
うかるビジネスがあったんです。それがア
ヘンの貿易で、アヘンの貿易をやっている
ほうが、海賊なんかよりもずっともうかる
ということで、アヘンの貿易に転向するん
ですね。そういったことになります。

アヘン貿易が盛んになって、その結果と
してアヘン戦争が起こります。ご存じのよ
うに、この戦争は、イギリスの圧倒的な勝
利に終わるわけです。イギリスは狙いどお
り中国に対して、南京条約という条約を押
しつけて、広州、厦門などなどの5つの港
を対外貿易に開かせることに成功します。
ところが、イギリスにとって思いもよらな
いことに、中国人の海賊が暴れ出して、
せっかく開港した港のあたりで暴れて
いるわけですね。そうすると、清朝はもち
ろん、イギリスも結果として、対応せざる
を得なくなるわけです。

どういう人たちが、海賊をやっていたかという
と、主には、やはり日本と同じように、漁
師、漁民たちでありました。ほかに、この当時、
不景気だったので、職を失った船員とかとい
う人たちで、ビジネスをやっている商人たちは
あまり参加していません。

主には中国人、とりわけ広東人、福建人が
メインなんですけれども、ほかにも、ポルトガ
ル人やイギリス人、アメリカ人など欧米人も
参加しておりました。これを鎮圧しないとい
けないんですね。清朝の海上警察、清朝の水
師なんですが、これは全然駄目なんです。ア
ヘン戦争の前から、かなり腐敗しておりま
して、例えば、軍艦をつくる、建造費、修理
費、これ、膨大な額ですが、これを自分の
ポケットに入れちゃうんです。ポケットに
入れちゃいますと、当然、建造、修理がで
きず、定数を満たさない状況になっている
わけですね。

それからさっき申し上げましたように、
海賊が水師に就職しますが、もう何だかわ
け分らないんですね。それから、アヘン

清朝による嘉慶海寇の「鎮圧」

- 武力鎮圧だけでは無理
- 形式的に海賊を降伏させて
水師（海上警察）に編入
＝海賊を水師にリクルート
- 海賊活動→アヘン貿易に転向

アヘン戦争後の中国沿海の混乱

- 南京条約（1842年）：イギリス・清朝
→広州、厦門、福州、寧波、上海が
開港
- 海賊活動の活性化
→対外貿易港の貿易に打撃
→清朝やイギリスなどが対応する必要

イギリスの介入

- イギリス船を海賊が攻撃
→イギリス海軍、海賊討伐開始
- イギリス軍艦は小型、しかし、乗員の
訓練と先進的技術により海賊に対して
圧倒的に優位
→大規模海賊消滅・福建人海賊没落
- 清朝地方当局・商人とイギリス海軍の
協力関係成立

戦争によってダメージを受けている。こんな状況で、この時期の水師は海賊より弱くて、随分バカにされた存在になっているわけです。

そこでイギリスが介入することになります。イギリス船を海賊が大規模に襲ったので、怒ったイギリス海軍が出動したのが、海賊討伐の始まりとなります。

当時、東アジアの海域に来ていたイギリスの軍艦というのは、さほど大きなものではありません。当時からすると、数百トン、大きくても1000トンぐらいで、実は、戦っている地方海賊の船とそんなにかわらないんですね、大きさは。ところが、やはり技術が進んでいるのと、それから、乗員がきちんと訓練を受けているために、この絵でも分かるように、2、3隻の軍艦で、何十隻もの中国海賊をたたきのめしているんですね。この結果、大規模な海賊というのはいったんは収まって、福建人の海賊は大体いなくなっていくます。

このイギリス海軍が使えると分かって、清朝の地方当局や、それから中国人の商人たちは、イギリス側と手を組んで海賊と対抗していくということになります。

ところが、1850年代になりますと、広東人の海賊が暴れ出します。広東人の海賊は、欧米製の火砲を使ったり、それから、欧米人に参加してもらったりします。

それから、海賊といいますが、こんな旗を掲げているイメージがあるかもしれませんが、こんな[どくろマークの]旗を掲げていたら、あっという間にイギリスの軍艦に撃沈されます。これは駄目なんですね。じゃあ、どうするかというと、やっぱりこちら[ユニオンジャック]ですね。こういうような、イギリス国旗とかアメリカ国旗とか、いろいろ備えておいて、イギリスやアメリカ船のふりをして、逃げまくるということをやっております。

それから、もともと海賊が雇われている。その上、水師のメンバーも海賊出身、指揮官まで海賊出身という状態ですから、広東人海賊が暴れるのも無理はない状況なんですね。

ところが、清朝、地方の政府は、この海賊を統制できません。まずお金がないんです。財政難でずっと雇うことができない。雇われたからって海賊活動をやめるかということ、そうではなくて、普通の海賊と同じように、助けてあげたんだから金を出せという感じでゆす

広東人海賊の興隆（1850年代）

- 欧米の大砲などを導入
- 欧米人が参加
- イギリス国旗などを掲揚して偽装



- 清朝地方当局が広東人海賊雇用
- 水師の多くがもともと広東人海賊

36

中英の地域的協力

- 中英の協力関係：清朝地方政府の要請でイギリス軍艦出動
→イギリス軍艦は海賊を捜索して掃討
→沿海各地で広東人海賊は衰退
- イギリス軍艦の停泊
→対外貿易港の安全確保・貿易の集中

37

るわけですね。クビになると、またすぐ海賊になる。まあ、ずっと海賊をやっているようなものですけども。こんな感じで、沿海の貿易は大混乱になるわけです。そこで、やはりイギリス海軍に出動してもらう。清朝の地方政府の役人が、イギリスの外交官を通じて、軍艦に出動を要請して、イギリス軍艦は海賊を搜索して、それを撃沈していく。これで、大体、広東人の海賊も衰えていって、イギリス軍艦が停泊して

いる対外貿易港は、海賊が近寄らなくなるので、非常に安全になります。貿易も集中していくということになります。しかし、イギリス海軍というのは、ちょっと律義なところがありまして、基本的に活動は公海に限定していて、領海の治安は、中国側、清朝側がやってくれということになります。ところが、清朝の地方政府というのは軍事力が不足していて、この武装した海賊のねぐらとなっている村々を鎮圧することができません。

当時の福建省の南部の村々はこのように、非常に嚴重に守られておりまして、こうしただけじゃ集合住宅みたいなものですが、非常に堅固な要害になっています。これを潰せないということですね。

しかし、清朝の地方のお役人たちにとってみると、貿易港に商船がいっぱいやってきて、貿易が集中して、関税などの税金を確保することができる。そうすると、こんなしょぼい海賊は鎮圧しなくてもいいということになるんです。財政的にはOKなので、地方のしょぼい海賊は見逃すということになります。

じゃあ、結局、中国の海賊はいつなくなったのかというと、これは1949年の中華人民共和国の成立の時期になります。これ、社会主義化が進んで、共産党政府の支配が全国の津々浦々に及んでいくことによって、海賊はなくなっていきます。

とりわけ、海賊が暴れていた、浙江、福建、広東の沿海というところは、国民党と共産党の内戦の最後の舞台となったわけですね。その後も、台湾に逃げていった国民党の政府と、中国共産党の政府がにらみ合いを続けていますから、たくさん軍隊が置かれて、緊張関係なので、とてもこんなところに海賊はいられないということになりますね。基本的に、この時期に海賊はいなくなるということになります。

地域的な海賊の存続

- イギリス海軍の活動は公海に限定
→領海の治安は清朝側が維持する必要
- 清朝地方政府の軍事力不足
→武装した海賊根拠地の村落を鎮圧できず
- 対外貿易港に貿易が集中して税金確保
→清朝地方当局は武力鎮圧の必要なし
→地域的な海賊の存続

福建南部の城塞村落



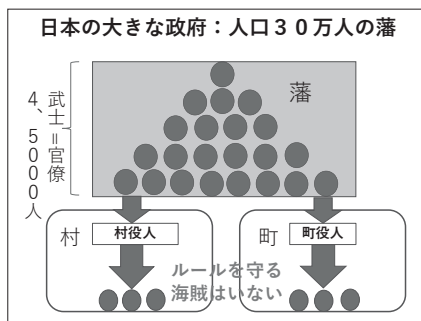
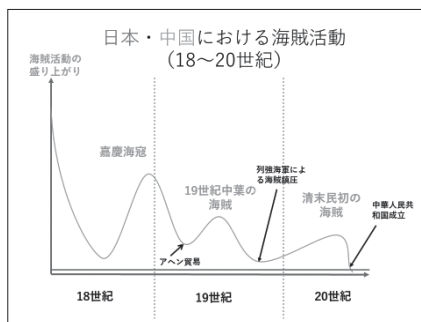
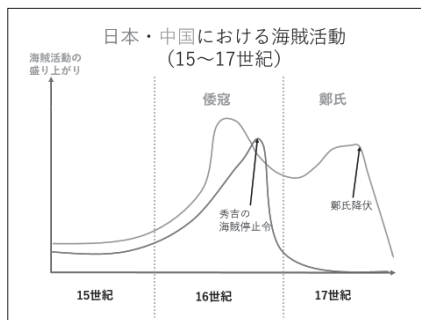
では、それを日本の海賊と比べてみます。こういったグラフを出すと、理系の先生方はもちろん文系の先生の方にも怒られそうですが、海賊の盛り上がりを縦軸にしますと。この赤が日本なんです。日本が盛り上がるのは倭寇のころです。秀吉のせいで静まって、17世紀にほとんどいなくなってしまう。中国の場合は、倭寇ですね、それから、また、17世紀の鄭氏が出てきます。それから、18世紀の末から、嘉慶の海寇で、先ほど出てきた19世紀半ばの海賊です。その後、ちょっと盛り上がって、1949年から50年ぐらいまで続いていくということになります。

従って、日本と中国では、350年ぐらいのギャップがあるということになります。

では、どうしてそうなるのかということですが、これは江戸時代の日本に例えば、人口30万人、藩があるとします。武士イコール官僚ですが、これが大体四、五千人います。こんだけたくさん官僚がいるんですね。そこから末端に、社会の下の方に支配を及ぼそうとすると、村役人などを通して支配していくんですが、さらに、下のほうに支配が及んでいきます。

日本がうまく行くのは、この村とか町、これが非常に強い、強固な団体をつくっていて、その中で言うことを聞かせることができるんですね。つまり、ルールを守る、海賊はいない江戸時代ができるわけです。

じゃあ、中国はどうだったのかということですが、中国の場合、大体平均すると人口30万人ですが、県に正規の役人はわずか数人しか来ないんですね。じゃあ、どうやって治めるかというと、これが数百人ぐらいの官僚といっているのか、民間人といっているのか、よく分からない事務員、下働き、こういった人たちを使うわけです。でも、これでも足りないんです。結局、具体的な業務は、徴税請負人であるとか、



地方のエリートたちであるとか、あるいは海賊ですね、これを使って、税金を取ったり、治安維持をしていくわけです。

ところが中国の場合は、日本のような、村のような団体はないので、ばらばらの人々がいる中で、ルールを守らせるのが大変難しいんですね。従って、海賊はなくならないということになります。

中国がこうした上の力が弱い政府になっていくのはどうしてかということなんですが、これを1700年から1850年の財政を見ていくと分かりやすいんですが、この時期、人口は約3倍になります。1.5億から4.3億ぐらいに増えます。

物価は同じものが1両で買えたものが、3両でないと買えなくなります。しかし、清朝の中央政府の財政規模は変わらない。ということはどういうことかというと、財政規模は3分の1になる。つまり、数字で表せ

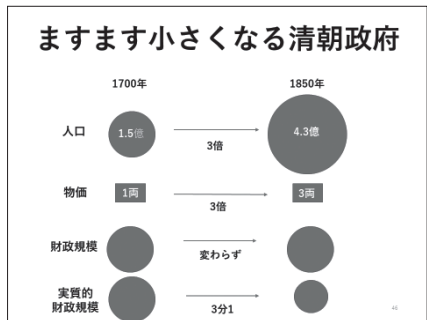
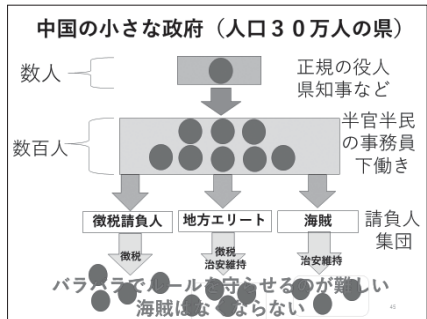
ないんですけども、清朝政府の財政的な力は、この150年で、3分の1になってしまうわけです。

従って、この上が非常に弱いんですね。どんどん色が薄くなってまいりますのは、つまり、上からの力が浸透しないということなんですが、非常に下のほうで規則を守らせることや、下のほうに対して、影響を及ぼしていくことができない政府になっていったわけです。

このようにしてみると、日本と中国というのは、非常に、国家、社会、その関係というのが違うということが分かります。日本は非常に、厳しい統治と強固な団体ができておりまして、忖度したり、それから「空気を読む」、死語ですね、これ、見えないルールを読む社会であります。従って、人々のコントロールというのは、非常に、お上、政府にとっては楽で、海賊は短期間で消滅するということになります。

一方、中国の場合は、非常に中央集権的に見えますが、末端に行くと、非常に緩やかな統治で、強固な団体ありません。従って、人々のコントロールというのは大変難しくて、海賊が長続きするということになります。

ということで、海賊の終わりを迎えるのに、大体350年ぐらい差が出たのは、そういったことになります。この写真は28年前ですね、浜松北高校の文化祭で、海賊もののアトラクションをやったときの写真です。ここにいるのは、28年前の私であります。まさか、28年前



に、こんなところで海賊の話をさせていた
だくことがあると思わなかったんですが、
これも何かの縁かと考えております。

本日は非常に拙い話ですが、ご清聴どう
もありがとうございました。

日中の国家・社会の違い

- 日本：厳しい統治と強固な団体
→ 忖度し、空気（ルール）を読む社会
→ ひとびとの統制が容易
→ 海賊は短期間で消滅
- 中国：ゆるやかな統治・強固な団体なし
→ ひとびとの統制が困難
→ 海賊が長続き
- 海賊の終焉に350年の差

47

